

博士論文（要約）

論文題目 古今和歌六帖とその時代

氏名 田中 智子

目次

凡例	3
序章 古今和歌六帖概説——研究史の回顧と本論文の主題と意義——	5
第Ⅰ部 古今和歌六帖の構成	
第一章 古今和歌六帖の構成	18
第二章 古今和歌六帖「歳時部」の構成——暦月を中心に——	30
第三章 古今和歌六帖「雑思部」の配列構造	43
——古今和歌集恋部との比較を中心に——	
第Ⅱ部 古今和歌六帖の撰集資料	
第一章 古今和歌六帖の万葉歌と天曆古点	60
第二章 万葉集から古今和歌六帖へ——和歌分類の方法をめぐって——	74
第三章 源順の大饗屏風歌——古今和歌六帖の成立に関連して——	87
第Ⅲ部 和歌史のなかの古今和歌六帖	
第一章 古今和歌六帖の物名歌——三代集時代の物名歌をめぐって——	102
第二章 古今和歌六帖から源氏物語へ——〈面影〉項を中心に——	116
第三章 古今和歌六帖と実方集——古今和歌六帖の享受の様相——	128
第Ⅳ部 初期定数歌歌人の研究	
第一章 曾禰好忠の「つらね歌」	144
第二章 円融院子の日の御遊と和歌——御遊翌日の詠歌を中心に——	158
第三章 述懐歌の機能と類型表現	172
——毛詩「鶴鳴」篇をふまえた和歌を中心に——	
終章 本論文のまとめと今後の展望	182
初出一覧	183

本文

本論文は、学位授与日である令和二年二月二〇日から五年以内に単行本等の形で出版予定のため、全文を公表することができません。

参考文献

原則として、『古今和歌六帖』以外の作品の本文引用の資料出典は以下に拠った。

和歌

- 新編国歌大観……私家集を除く歌集
- 新編私家集大成……私家集
- 平安朝歌合大成 増補新訂版……歌合
- 『曾禰好忠集』注解……『好忠集』
- 『能宣集注釈』……『能宣集』
- 『万葉集 本文編』（塙書房、一九九八年）……万葉集

その他

- 新編日本古典文学全集……土佐日記、伊勢物語、和泉式部日記、枕草子、源氏物語、十訓抄、今昔物語集
- 日本古典文学大系……性霊集
- 『田氏家集注 卷之上』（和泉書院、一九九一年）……田氏家集
- 契沖全集（岩波書店）……古今余材抄、雑々記
- 本居宣長全集（筑摩書房）……古今集遠鏡
- 群書類従……大鏡裏書
- 新訂増補国史大系……本朝文粹
- 大日本古記録……小右記
- 日本歌学大系……八雲御抄
- 新釈漢文大系……玉台新詠
- 『南宋刊單疏本毛詩正義』（人民文學出版社、二〇一二年）……
『毛詩』・「毛伝」・「鄭箋」
- 『芸文類聚』（中華書局、一九六五年）……芸文類聚
- 『杜詩詳注』（中華書局、一九七九年）……杜詩詳注
- 『初学記』（中華書局、一九六二年）……初学記
- 『白氏六帖事類集』（新興書局、一九六九年）……白氏六帖
- 京都大学文学部国語国文学研究室編『諸本集成倭名類聚抄』……和名抄

○中田祝夫・林義雄編『字鏡集 白川本影印編』……字鏡集

○『新古今集古注集成 近世旧注編3』……八代集抄、新古今和歌集口訣

また、本論で引用した参考文献は次の通りである。

青木太朗「古今和歌六帖」の出典をめぐって―「貫之集」との比較を通して―(『和歌文学研究』七一、一九九五年一月)

青木太朗『古今和歌六帖』と「重之百首」―「六帖」の撰集資料をめぐって―(『横浜国大語研究』一五、一九九七年三月)

青木太朗『古今和歌六帖』の配列をめぐって―編纂意識の側面―(『和歌文学研究』八三、二〇〇一年十二月)

青木太朗「古今和歌六帖」(『平安文学研究ハンドブック』和泉書院、二〇〇四年)

青木太朗『古今和歌六帖』における万葉集歌についての一考察―題との比較を通して―(久保木哲夫編『古筆と和歌』笠間書院、二〇〇八年)

青木太朗『古今和歌六帖』の作者記載について(和歌文学会、平成二六年度一月例会)

青木太朗「古今和歌六帖」(『和歌文学大辞典』古典ライブラリー、二〇一四年)

赤羽淑「和歌の韻律」(『和歌文学の世界 第十集』笠間書院、一九八六年)

新井栄蔵「古今和歌集四季の部の構造についての一考察―対立的機構論の立場から―」(初出一九七二年、『日本文学研究資料叢書 古今和歌集』有精堂、一九七六年)

家永三郎『上代倭絵年表 改訂版』(墨水書房、一九六六年)

池田亀鑑「美論としての枕草子」(初出一九三〇年、『研究枕草子』至文堂、一九六三)

池原陽斉『古今和歌六帖』の「萬葉連番歌」一覧(『日本文学文化』一三、二〇一四年二月)

池原陽斉「赤人集と古今和歌六帖―十世紀後半の萬葉歌の利用をめぐって―」(『萬葉集訓読の資料と方法』笠間書院、二〇一六年)

池原陽斉『古今和歌六帖』の「萬葉歌人」一覧(『女子大國文』一六三、二〇一八年九月)

池原陽斉『古今和歌六帖』古筆切本文・写本本文対校稿―(『日本文学文化』一八、二〇一九年二月)

池原陽斉『古今和歌六帖』所収萬葉歌の性格―類聚古集「無訓歌」からの検証(『万葉古代学研究年報』一七、二〇一九年三月)

乾善彦『万葉集』卷十八補修説の行方』《高岡市万葉歴史館紀要》一四、二〇〇四年三月）

犬飼公之『影の古代』（おうふう、一九九一年）

犬飼公之『影の領域』（同、一九九三年）

宇佐美昭徳「古今和歌六帖における恋歌分類の二元構造」《古今和歌集論―万葉集から平

安文学へ》笠間書院、二〇〇八年）

内田徹「述懐歌の形成」《文芸と批評》六一五、一九八七年三月）

大久保正「古今和歌六帖の萬葉歌について」（初出一九五七年、『萬葉の伝統』塙書房、一九五七年）

大久保正「古代萬葉集研究史稿（その二）―古点以前の萬葉研究―」《北海道大学文学部紀要》十、一九六一年十一月）

大野晋「万葉集卷第十八の本文に就いて」（『国語と国文学』二二―三、一九四五年四月）
大淵貴之「唐代勅撰類書の中核概念―『芸門類聚』と『群書治要』を手がかりとして―」（初出二〇〇六年、『唐代勅撰類書初探』研文出版、二〇一四年）

岡田希雄「源順及同為憲年譜（上）」《立命館大学論叢》八、一九四二年七月）

小川靖彦「天曆古点の詩法」（初出一九九九年、『萬葉学史の研究』おうふう、二〇〇七年）

奥村恒哉『古今集・後撰集の諸問題』（風間書房、一九七一年）

小野泰央『大江千里集』「詠懷」部と「添ふる歌」―その表現と主題について」（『和歌文学研究』七六、一九九八年六月）

片桐洋一『後撰集』の本性」（初出一九五六年、『古今和歌集以後』笠間書院、二〇〇〇年）

片平博文「平安京北郊にあった雲林院の発展と衰退」《立命館地理学》二四、二〇一二年）

川口久雄『日本古典文学大系 和漢朗詠集』（岩波書店、一九六五年）

菊川恵三「面影と夢」《国語と国文学》八四―一一、二〇〇七年一一月）

岸上慎二『後撰和歌集の研究と資料』（新生社、一九六五年）

北山円正「子の日の行事の変遷」《神女大國文》一七、二〇〇六年三月）

木戸裕子「平安詩序の形式―自謙句の確立を中心として―」（『語文研究』六九、一九九〇年六月）

清田伸一「古今六帖と千載佳句」（『語文研究』二二、一九六六年二月）

久保木哲夫「古今和歌六帖における重出の問題」（初出二〇一二年、『うたと文献学』笠間書院、二〇一三年）

久保木哲夫「七夕」と「織女」―「たなばた」表記考―」（『国語と国文学』九一―七、二

〇一四年七月)

熊谷直春「古今和歌六帖の作者名表記」(初出二〇〇〇年、『古今集前後』武蔵野書房、二〇〇八年)

熊谷直治「古今和歌六帖の成立」『文芸批評』十一、二〇〇五年五月)

倉田実「女が男に物を返す時——平安和歌にみる離婚・離縁——」『大妻女子大学紀要——文系——』四二、二〇一〇年三月)

古今和歌六帖輪読会『古今和歌六帖全注釈』第一帖〜第三帖(二〇一三〜二〇一六年)

後藤利雄「古今和歌六帖の撰者と成立年代に就いて」『国語と国文学』三〇—五、一九五三年五月)

小町谷照彦「古今六帖を読む——王朝歌語の追求——」『国文学』三四—一三、一九八九年一月)

近藤みゆき「古今和歌六帖の歌ことば」(初出一九九八年、『古代後期和歌文学の研究』風間書房、二〇〇五年)

今野厚子『円融院御集』の編纂——合綴本『代々御集』の終焉——(初出一九八〇年、『天皇の和歌——三代集の時代の研究——』新典社、二〇〇四年)

紫藤誠也「古今和歌六帖と和漢朗詠集」『和歌文学研究』二六、一九七〇年)

紫藤誠也「古今六帖で読む源氏物語『若紫』」『中古文学』九、一九七二年五月)

品川和子「蜻蛉日記の方法と源泉」(初出一九六七年、『蜻蛉日記の世界形成』武蔵野書院、一九九〇年)

新沢典子「古今和歌六帖と万葉集の異伝」『日本文学』五七—一、二〇〇八年)

鈴木日出男「歌言葉収集——『古今六帖』」(初出一九八〇年、『古代和歌史論』東京大学出版会、一九九〇年)

鈴木宏子「〈心を置く〉という和歌——愛情と隔意のはざま——」(初出二〇〇三年、『王朝和歌の想像力——古今集と源氏物語——』笠間書院、二〇一二年)

鈴木宏子「古今和歌集の恋歌」(初出二〇〇四年、『王朝和歌の想像力——古今集と源氏物語——』笠間書院、二〇一二年)

鈴木宏子「古今和歌六帖の史的意義」(初出二〇〇七年、『王朝和歌の想像力——古今集と源氏物語——』笠間書院、二〇一二年)

高木和子『古今六帖』による規範化——発想の源泉としての歌集——(初出二〇〇三年、『源氏物語再考 長編化の方法と物語の深化』岩波書店、二〇一七年)

- 高木和子「伊勢物語の贈答歌」『女から詠む歌 源氏物語の贈答歌』青簡舎、二〇〇八年）
- 高田祐彦「古今・竹取から源氏物語へ―「あはれ」の相関関係―」（初出一九九六年、『源氏物語の文学史』東京大学出版会、二〇〇三年）
- 滝本典子「古今六帖と赤人集」『皇学館論叢』一一四、一九六八年十月）
- 武田恒夫『屏風絵にみる季節』（中央公論美術出版、二〇〇八年）
- 田坂順子『古今集』と漢詩文―物名歌をめぐる―」（『和歌文学論集 二 古今集とその前後』風間書房、一九九四年）
- 田島智子「屏風歌から古今和歌六帖へ」（『屏風歌の研究 論考篇』和泉書院、二〇〇七年）
- 田中新一『平安朝文学に見る二元的四季観』風間書房、一九九〇年
- 田中登「古今六帖の貫之歌」（『平安文学研究』六三、一九八〇年七月）
- 土田直鎮「平安中期に於ける記録の人名表記法」（『奈良平安時代史研究』吉川弘文館、一九九二年）
- 鉄野昌弘「家持集と万葉歌」（鈴木日出男編『ことばが拓く古代文学史』笠間書院、一九九九年）
- 徳原茂実「宇多・醍醐朝の歌召をめぐる」（初出一九八〇年、『古今和歌集の遠景』和泉書院、二〇〇五年）
- 中周子『拾遺和歌集』における物名歌」（『樟蔭国文学』四〇、二〇〇三年三月）
- 中島和歌子「和漢の類書の構成及び部類標題の類型について―歳時部における四季・時間帯重視や時節・地儀の独自性を中心に―」（『和漢古典学のオントロジ 三』二〇〇六年）
- 中西進『古今六帖の万葉歌』（武蔵野書院、一九六四年）
- 西下経一『古今集の伝本の研究』（明治書院、一九五四年）
- 西山秀人「源順の歌風について―源高明大饗屏風歌を中心に」（『古典論叢』二二、一九九〇年八月）
- 西山秀人「源順歌の表現―『古今和歌六帖』出典未詳歌との関連―」（『和歌文学研究』七六号、一九九八・六）
- 西山秀人「枕草子類聚章段における古今和歌六帖の受容―地名章段を中心に―」（『古代中世文学論 第二集』新典社、一九九九年）
- 世文学論考 第二集』新典社、一九九九年）
- 西山秀人「源順の屏風歌―その歌風の変遷について―」（『学海』一七、二〇〇一年三月）
- 西山秀人『古今和歌六帖』の出典未詳歌―その表現特性をめぐる―」（『古代中世文学論考 七』新典社、二〇〇二年）

西野翠「源氏物語「面影」論―「明石」巻における「面影そひて」をめぐって―」（『玉藻』五二、二〇一八年三月）

丹羽博之「曾丹集と漢詩文―「つらね歌」と「蟬聯体」の詩について―」（二）（『国文学研究ノート』十二、一九八〇年七月）

丹羽博之「曾丹集と閨怨詩」（『国文学研究ノート』十三、一九八一年四月）

萩谷朴『平安朝歌合大成 新訂増補版』（同朋舎出版、一九九五年）

間智子「源順集成立考―二系統の前後関係―」（『お茶の水女子大学国文』六四、一九八六年一月）

橋本不美男『王朝和歌史の研究』（笠間書院、一九七二年）

原田真理「源順と和歌―源順集を手がかりとして―」（『香椎潟』三三、一九八七年九月）

人見恭司『古今集』物名歌についての考察（『中古文学論攷』五、一九八四年一〇月）

人見恭司「物名歌概念の変遷について―「隠題」という語を通して―」（『国文学研究』九五、一九八八年六月）

平井卓郎『古今和歌六帖の研究』（明治書院、一九六四年）

平井卓郎「古今六帖についての一考察―蜻蛉日記との関連において―」（『武蔵大学人文学会雑誌』一一一、一九六九年）

平田喜信「作品としての古今和歌六帖」（『平安中期和歌論考』新典社、一九九三年）

廣田收「源氏物語における「ゆかり」の様相―面影・男のゆかり―」（『日本文学』二八一〇、一九七九年一〇月）

深谷秀樹「拾遺集の物名歌と藤原輔相―食物を詠んだ歌をめぐって―」（『和歌文学研究』八六、二〇〇三年六月）

福田智子「〈順百首〉の表現摂取―先行歌集・歌合との関わりと『古今和歌六帖』」（『文化情報学』六一、二〇一一年三月）

福田智子ほか『古今和歌六帖』出典未詳歌注釈稿―第六帖（5）菊々紫苑―」（『文化情報学』七一、二〇一二年三月）

福田智子「題と本文の間―『古今和歌六帖』諸本の本文異同と『万葉集』―」（『同志社国文学』七八、二〇一三年三月）

福田智子『古今和歌六帖』と嘉暦伝承本『万葉集』―『万葉集』の訓の生成と流布について―」（『社会科学』一〇二、二〇一四年五月）

藤岡忠美「曾禰好忠と遊戯技巧歌」（『藤女子大学国文学雑誌』三、一九六七年十一月）

藤岡忠美「曾禰好忠の訴歎調の形成」(藤岡忠美『平安和歌史論』桜楓社、一九六六年) 藤本宗利『枕草子研究』(風間書房、二〇〇二年)

古瀬雅義「清少納言の見た『古今和歌六帖』は寛文九年版本の祖本か」(初出二〇二二年、『枕草子章段構成論』笠間書院、二〇一六年)

古谷範雄「誹諧歌・物名歌」小考」(『和歌文学研究』五七、一九八八年十二月)

本間洋一「王朝和歌の表現と漢詩文について―中古・中世の私家集世界と『和漢朗詠集』―」(初出一九九〇年、『王朝漢文学表現論考』、和泉書院、二〇〇二年)

松田武夫『古今集の構造に関する研究』(風間書房、一九六五年)

松本真奈美「曾禰好忠『毎月集』について―屏風歌受容を中心に」(『国語と国文学』六八―九、一九九一年九月)

三木雅博『和漢朗詠集とその享受』(勉誠社、一九九五年)

水口菜生子『源順集』の「大饗」について―大将初任饗―」(『国文』一〇一、二〇〇四年七月)

村田理穂「『面影』の系譜―万葉から新古今時代まで―」(『国語国文学研究』二一、一九八六年二月)

村田理穂「続『面影』の系譜」(同二三、一九八七年九月)

室城秀之『和歌文学大系 古今和歌六帖上』(明治書院、二〇一八年)

目崎徳衛「円融上皇と宇多源氏」(初出一九七二年、『貴族社会と古典文化』吉川弘文館、一九九五年)

森淳司「万葉集作者未詳歌巻の分類配列―巻七・巻十の詠物歌寄物歌を中心として―」(『上代文学』三六、一九七五年七月)

安田徳子「資子内親王の生涯―円融朝歌壇の一側面―」(『名古屋大学文学部研究論集』二九、一九八三年三月)

藪葉子「平安時代の和歌と『伊勢物語』―『古今和歌六帖』に見える『伊勢物語』所載歌を通して―」(山本登朗編『伊勢物語 享受の展開』竹林舎、二〇一〇年)

藪葉子『源氏物語』引歌の生成―『古今和歌六帖』との関わりを中心に』(笠間書院、二〇一七年)

山口博『王朝歌壇の研究 村上冷泉円融朝篇』(桜楓社、一九六七年)

山田孝雄「万葉集と古今六帖」(『萬葉』三、一九五二年四月)

山本明清『古今和歌六帖標注』

論文の内容の要旨

本論文は、十世紀後半頃に成立したとされる私撰集『古今和歌六帖』（以下『古今六帖』）を中心に、同時代の和歌研究を行ったものである。本論文の目的は、次の二点にある。一点目は、『古今六帖』の構成や、その和歌表現を研究することで、ひとつの文学作品としての同集の特色を明らかにすること。二点目は、『古今六帖』と前代・後代の作品との関係について検討を加えることで、広く和歌史的・文学史的展望のなかに同集を位置づけることである。

本論文は、以下の四部に加え、序章、終章から成る。

第Ⅰ部 古今和歌六帖の構成

第Ⅱ部 古今和歌六帖の撰集資料

第Ⅲ部 和歌史のなかの古今和歌六帖

第Ⅳ部 初期定数歌歌人の研究

このうち特に第Ⅰ部～第Ⅲ部では『古今六帖』を主たる研究の対象とし、第Ⅳ部では、『古今六帖』成立と同時期に活躍した、曾禰好忠や源順をはじめとする初期定数歌歌人の詠歌の研究を行った。好忠や順の和歌には『古今六帖』所載歌と表現上の影響関係があるとみられるものが少なからず存しており、その見通しから、初期定数歌歌人の研究にも取り組んだものである。

序章「古今和歌六帖概説——研究史の回顧と本論文の主題と意義——」では、『古今六帖』

についての概要を「伝本」「構成・歌数」「撰者・成立年代」「撰集資料」の四つの観点から述べた。またこれまでの研究史を「前代の作品と古今六帖との比較研究」「後世の作品と古今六帖との比較研究」「古今六帖そのものの研究」の三項目に分けて概観したうえで、本論文の主題と構成について概略し、本論文が研究史のなかでいかなる意義を有するかを論じた。

第Ⅰ部「古今和歌六帖の構成」では、『古今六帖』の構成について論じた。歌集の構成や構造の研究としては、松田武夫氏による『古今集』の研究が先駆的なものであるが、稿者は『古今六帖』についてもその構成や構造の研究が有効かつ重要だと考える。というのも、二十二部、五百余の項目に和歌を分類する点が同集の最大の特徴であり、その分析を

行うことは、同集の特徴と性格を明らかにするうえで不可欠と思われるからである。そこで第Ⅰ部では、特に『古今集』や唐代類書の構成が、『古今六帖』にいかなるかたちでふまえられているかに注目して考察を行った。

第一章「古今和歌六帖の構成」では、『古今六帖』全体の構成に分析を加えた。同集の構成については、従来「春・夏・秋・冬・天・山・田・野・都・田舎・宅・人・仏事・水・恋・祝・別・雑思・服飾・色・錦綾・草・虫・木・鳥」の二十五部構成と説明されることがあった。そのことをふまえて本章では、類書と『古今集』の構成との比較等に基づき、『古今六帖』が本来「歳時・天・山・田・野・都・田舎・宅・人・仏事・水・恋・祝・別・雑思・服飾・色・錦綾・草・虫・木・鳥」の二十二部構成であった可能性があることを指摘した。そのうえで、これらの部の名称や配列に唐代類書からの影響が濃厚であることから、『古今六帖』は唐代類書のような網羅性と検索性を備えた「和歌における類書」を企図して編まれたものであると結論づけた。

第二章「古今和歌六帖「歳時部」の構成——暦月を中心に——」では、第一帖「歳時部」の構成に検討を加え、歳時部には、暦月の進行を基軸に時の推移を示すという『古今六帖』ならではの時間構造が認められることを論じた。それらの暦月による項目の採歌方針には、月次屏風歌からの影響が強いとみられることが従来指摘されてきたが、本章ではさらに、先行の歌合からの影響が小さくないであろうことを明らかにした。そして、十二の暦月の項目がもれなく収集されていること、また各季節の初めと果ての項目がそれぞれ一つずつ掲げられていることなどから、同集の編纂方針に網羅性や均等性が存することを指摘した。

第三章「古今和歌六帖「雑思部」の配列構造——古今和歌集恋部との比較を中心に——」では、第五帖「雑思部」の諸項目がどのような配列構造を成しているかについて、『古今集』恋部の配列構造との比較に基づきつつ論じた。そのなかで『古今集』においては基本的に恋の進行過程に即して歌が配列されているのに対し、『古今六帖』においては、恋における様々な局面・情況に基づく項目が多様な連想・類想によって配列されていることを明らかにした。

第Ⅱ部「古今和歌六帖の撰集資料」では、『古今六帖』がどのような歌集を撰集資料としたのか、またそれらの撰集資料からいかなる方針で和歌を採録したかに検討を加えた。

第一章「古今和歌六帖の万葉歌と天暦古点」では、『古今六帖』の万葉歌がいかなる資料

から採歌されたのか、天曆古点との関係はどのようなものかに検討を加えた。同集には多くの万葉歌が採録されており、その本文は、伝承による部分が大きいとの見方が一般的である。本章では、その本文を桂本等の『万葉集』の古写本の本文・訓と比較したうえで、両者が密接な関係にあることを指摘し、『古今六帖』によって『万葉集』の古訓の具体相を知りうる可能性があることを論じた。

第二章「万葉集から古今和歌六帖へ——和歌分類の方法をめぐって——」は、『古今六帖』が『万葉集』を単なる採歌源としただけではなく、和歌分類の方法の点でも『万葉集』に学んだ可能性を考察した。具体的には、『万葉集』巻十などにみられる詠物歌・寄物歌が、『古今六帖』の、歌に詠まれた景物等によつて歌を類聚するという構成の先蹤であつたことを指摘した。そのうえで、『古今六帖』における和歌分類の方法が『万葉集』のそれに学んだ可能性があることを論じた。

第三章「源順の大饗屏風歌——古今和歌六帖の成立に関連して——」では、源順が詠んだ屏風歌「西宮の源大納言大饗日たつるれうに四尺屏風あたらしくてうぜさしむるれう哥」に検討を加えた。同屏風歌の成立をめぐつては諸説があるが、本論文では、村上天皇中宮の藤原安子が営んだ中宮大饗の屏風歌であるとの新見を提出した。また近年、源順が『古今六帖』の撰者である可能性が指摘されてきたが、上記屏風歌の成立の問題と、同集に採録された順の歌は当該屏風歌に限られること等を合わせ考えると、順を撰者とみなすことには慎重であるべきことを指摘した。

第三部「和歌史のなかの古今和歌六帖」では、『古今六帖』の和歌表現に、主に和歌史・文学史的観点から考察を加えた。特に、『古今六帖』が後代の文学作品にいかなる影響を与えたかに焦点を当てた。

第一章「古今和歌六帖の物名歌——三代集時代の物名歌をめぐって——」では、『古今六帖』にみえる物名歌を抽出し、その表現の特徴を三代集時代の物名歌のそれと比較検討したうえで、『古今六帖』の和歌史上の位置づけに分析を加えた。その結果、『古今六帖』の物名歌の表現が、三代集時代の物名歌の潮流とは異なり、物名題の選び方の点においても歌の表現の点においても類型的な技巧を指向するものであつたことなどを明らかにした。

第二章「古今和歌六帖から源氏物語へ——〈面影〉項を中心に——」では、『古今六帖』に類聚された和歌が『源氏物語』の散文表現にいかなる影響を与えたかについて、第

四帖「恋部」〈面影〉項を例にとって論じた。その際、第四帖「恋部」と第五帖「雑思部」という恋歌を収集した両部が、それぞれいかなる性格を有するかについても考察し、「恋部」では、恋の情念をかたどる歌ことばに基づき項目が立てられているのに対し、「雑思部」では、恋の情況・段階に基づき項目が立てられていることを論じた。

第三章 「古今和歌六帖と実方集——古今和歌六帖の享受の様相——」では、『古今六帖』が後代の歌人にいかなるかたちで享受されたかをめぐって、『藤原実方集』を対象として検討を加えた。その結果、『古今六帖』が、成立後ほどなくして流布し、人々の和歌の教養の基盤を成すような歌集として重用されたであろうことを明らかにした。

第四部 「初期定数歌歌人の研究」では、『古今六帖』成立とほぼ同時代に活躍した歌人と、その私家集とを中心に検討を加えた。

第一章 「曾禰好忠の「つらね歌」では、曾禰好忠が独自に試みた和歌連作形式「つらね歌」の表現を分析した。「つらね歌」には、好忠が他の和歌でも繰り返し詠んだ歌語・表現・主題が用いられているが、そればかりではなく、「音」とことばへのこだわりに基づく特有の表現がみられること等を論じた。

第二章 「円融院子の日の御遊と和歌——御遊翌日の詠歌を中心に——」では、寛和元年に円融院が紫野で営んだ子の日の御遊の参加者、関係者による和歌の表現について分析し、それらが前日の御遊、特に歌会の次第と深く関わる内容をもつとみられることを論じた。御遊の次第についてより厳密、具体的に分析し、紫野という地で子の日の御遊が行われたことの意義を探ること、これらの詠歌の解釈が深まる可能性があることを指摘した。

第三章 「述懐歌の機能と類型表現——毛詩「鶴鳴」篇をふまえた和歌を中心に——」では、『毛詩』「鶴鳴」編をふまえた述懐歌が、源順の詠歌をはじめとして、平安朝に多数詠まれたことに着目し、時代に応じた変遷を検討したものである。また、述懐歌がそもそもいかなる機能を有するものであったかという点にも検討を加え、述懐歌の平安貴族社会での役割について論じた。

終章 「本論文のまとめと今後の展望」では、本論文で考察してきた内容、主張をまとめるとともに、稿者の今後の研究の展望を述べた。